「今日の説教、聴き手のために」　2007/12/16　明治学院教会(97)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩　井　健　作

「戸の外から」

新約聖書　ヨハネ黙示録３章１４節－２１節

1、私たちはの生活は様々な暦に網がけされている。太陽暦、歴年、年度、官歴、各種民間歴、季節歴。時間を暦に意義付けることは生活や思考、価値観の形成に大きく影響している。１２月２５日をイエス誕生の日としたのは、ローマの太陽神の冬至祭のキリスト教化であった。これを中心に教会暦がアドヴェント（待降節）を含めてできてきた。日曜日は復活祭から根拠付けられ、カレンダーの週日の初日（神との関わりの日）となった。しかし最近のビジネス手帳は月曜日から始まり週末を休息として、仕事型の思想で編集されている。価値観の違がある。

2、教会歴には、それにふさわしい聖書テキストを教会は選んできた。今日選んだヨハネ黙示録３章２０節も教会歴テキスト。だがそれが入ったのはそれなりの歴史がある。この書物はローマの皇帝によるキリスト教への迫害が厳しかった時代、迫害を受けた信徒への激励の書物として書かれた。ここは小アジアの七つの教会に宛てたうちのラオデキアの教会の部分の一節。この街は織物や医学が盛んで富める価値観に埋没しいた。教会も例外ではなかった。だから「冷たくも熱くもない」(15)「自分の惨め（さ）・・が分かっていない」(17)「だから、熱心に努めよ、悔い改めよ」(19)と言われ、「戸を叩く」モチーフが続く。義人は来たるべき世においてメシヤ（救い主）と食事をするという期待はユダヤ教以来の考え（ルカ12:36 参照）。黙示録の著者は迫害の最中の教会に、キリストの来臨を告げ、迎え入れることのできる信仰生活をすすめている。迫害を行う側の思想に組み込まれない生活習慣を組みたてるようすすめる。

3、このテキストはドイツのプロテスタント音楽家Ｊ．Ｓ．バッハが待降節に位置付けた。彼はカンタータ（１６世紀以降イタリヤの楽器を伴った独唱曲の形式）６１番に用いた。バッハは礼拝がカトリックの習俗のなかに固定化されていた時代、新しい音楽を用いての礼拝の再創造を試みた。６１番の題は「いざ来たれ異邦人の救い主よ」。「異邦人」（マタイの東の博士）は当時、ローマカトリックに対して抗議をあげたプロテスタント派自らにあたはめて理解されていたに違いない。現代的には社会から疎外されたものを指すだろう。救い主を当然のことのように理解をしていて、危機感をもたないラオデキヤの教会に対して、主は「戸の外から」訪れている。それは予想外にも「異邦人の主」なのだ、というメッセージを我々は聞く。バッハはこのテキストの伴奏に弦楽器のはじく音を付けている。我々はクリスマスにはじけて聞こえる様々な呼びにイエスの「戸の外から」の声を聞き取りたい。